

2003年度より、高等学校三年生の選択者を対象に、学校設定科目『生命論』を開講してきた。本発表は、倫理の教員と私(生物)の2名で担当している『生命論』（三年生・選択2単位）に関する実践報告である。

「命の尊重」については、『生命論』を開講する以前から、生物の授業内で適宜、取り扱ってきた。またSTSなど社会との関連性が強調されてきたが、教科としての生物においては、純粋な科学を扱うべきであり、基礎的な知識を習得することで、生命観が育成され、倫理的な判断も可能であると考えてきた。しかし、分子生物学分野の教材開発・授業実践の過程で、疑問を抱き始め、『生命論』を開講することになった。

生命科学の急速な進歩により、生殖医療や臓器移植、脳死、終末期医療などの知識だけでなく、生命の質に関する倫理的問題は避けて通れない現状にある。これらの問題は科学者や医療従事者だけでなく一般市民にも判断が求められている。それゆえ高等学校における役割は大きいと考える。しかし、これらのことは、高等学校の授業の中では、

「理科」や「倫理」等の多くの教科にまたがる、多角的で高度な基礎知識が必要である、解答が明確で画一的でなく難しい、そのためほとんど扱われていないのが現状である。

そこで『生命論』では、以下の手順で授業を展開している。

- 1) 講義通して、科学的基礎的な知識や考え方を学習させ、さらに実験観察から命を実感させる。
- 2) 課題を設定することで、生徒達が自分の問題としてこれを捉えさせる。
- 3) 互いの議論を通して、様々な視点や立場の違いを理解し、自己の立場を明確化させる。

これらの過程を通して、各自の生命観の形成を目指すことを目標としている。

またこれらの過程で、多方面の専門家による支援は、必要不可欠であり、またより思考を深める一助となる

ため、医療従事者(産婦人科医師・看護師)・倫理学者(生命倫理)・生物学者(発生学・科学史)を招き、講義や議論に参加いただいている。

具体的には、第一期と第二期に分けて行なった。

第一期ではより身近な問題として「人工妊娠中絶」を共通のテーマとして提示し、生命を考える上でのさまざまな科学的な知識や視点を、習得させる一方、各自の生命観を見つめ直させ、他者との議論の重要性を認識させた。

第二期では、第一期で習得した様々な視点をもとに、「死」を共通のテーマとして取り上げ、「安楽死・尊厳死をめぐる」、「脳死と臓器移植」、「末期医療とケアのありかた」というテーマを各自の希望により選択し、より少人数のグループで議論しながら、その問題について考えを深め、各自の生命観の育成を目指した。極力自分たちで必要な資料などを見つけ考える形態をとり、同時に専門的な知識も必要となるため、立場が異なる講師を招いて示唆をいただくことでより発展的なものになると考えた。

授業形態は、基本的な知識を意見交流を交えながら提示したうえで、できるだけ生徒相互の議論に多く時間を確保した。教員も加わることで様々な視点や立場の違いを明確化させ、議論が活性化するように配慮した。さらに担当している2名の教員は、常に授業に参加し、互いに自分の価値観に基づいた発言を行ってきた。そのため、両者での意見の相違が明らかになる場面もあり、生徒達にはとても新鮮に感じたようである。

今年で三年目となるが、生命論で用いている手法：自らの問題として受け止め、互いの議論を通して、自分を見つめ直す方法は、各自の生命観の育成にとっても有効であり、生徒達に場を提供する意義は十分にあると感じている。一方、課題もあきらかになり、本年度は実施形態を少し変更している。これらも併せて報告する予定である。